朝夷巡島記第八編 五

村田

へ 遠13
1278
40上

1278
40

村田

朝夷巡島記全傳第八編巻之五

東都　松亭金水編次

續輯第十九　身を捐て節を全うし佳人の情　残毒忽地報ふ家族が最期

秋も九月下浣夕の風の身ふゞ染む。川きゝ生ー芦茅ハ花も竭さぬうちさゝだ。
葉ま一尾花霏こと。まゞき雪うと迄う。筐嬢ハ穉児の翠麻呂とお化捨さまの
測へや身と没めんと岸ゝまちうこを処此処と。呻吟て傍とう人とゞ石ハて刻める
地蔵ゝ。弐年経うゝ吾生て。臺坐後光も剛損じうゞ。何者ゝ著せまゝ色
けん。菅の小笠も今ハそや。雨ハ腐ちん破羅ゝハ。骨のこ連うハ木枯ハ吹
荒ゝまー蜘蛛の巣ゝ。冬の山田ハ獨ゝ。破まー案山子ハ彷彿ゝ。嬢ハ作ゞて
額著ゝ。六道能化と笑えゝ。地獄并の尊ゝも。川きの凡ハ炙暴ゝま雨の

降る日も雪の夜も。身軀彰りとちのんへ。衆生済度のゐさうぐ。この世へ愛の
仮の宿。今宵ふ迫る祝と子ゞ。後の世助けのんう。傳へ吱く稚きりのい罪業。
浅き故とりん。親と倶ゐんえもやうず。賽の二の木ふ集まりん。井の教化と受る
とぞ。こもゞ誠のこゝろ。稚きりの。後世とこそ。偏ふ憑こまゐ〳〵と。操かゝる
愚痴の負ゞふ初夜も近づきこう。倘董次笠ゞ往方と探。こゝめて會ば死
後ま志さえ得遂ぬのこう。息ある中の恥辱。慈愛悔も世ふ在る程の心
ゐりり今更ふ何とういえん一刻も。汐湛びまと思ひあり。と弱る心と自ら
励まし。岸ふ生る柳蔭小暗き方ふこちうく。南無阿弥陀佛弥陀仏。唱へ
あゞ身と流ら。過巻水へ逆しまふ。飛入らんとまる。裾曳捉へまゞ候の媛
君。と声ひらきて是ぞこま。宮小四郎が追手。と心周章て振ふ〳〵耳び
入らんと踏出し片足。その間ふ緊と抱きこう。媛ハ在ふもたゝれぬ思ひ。

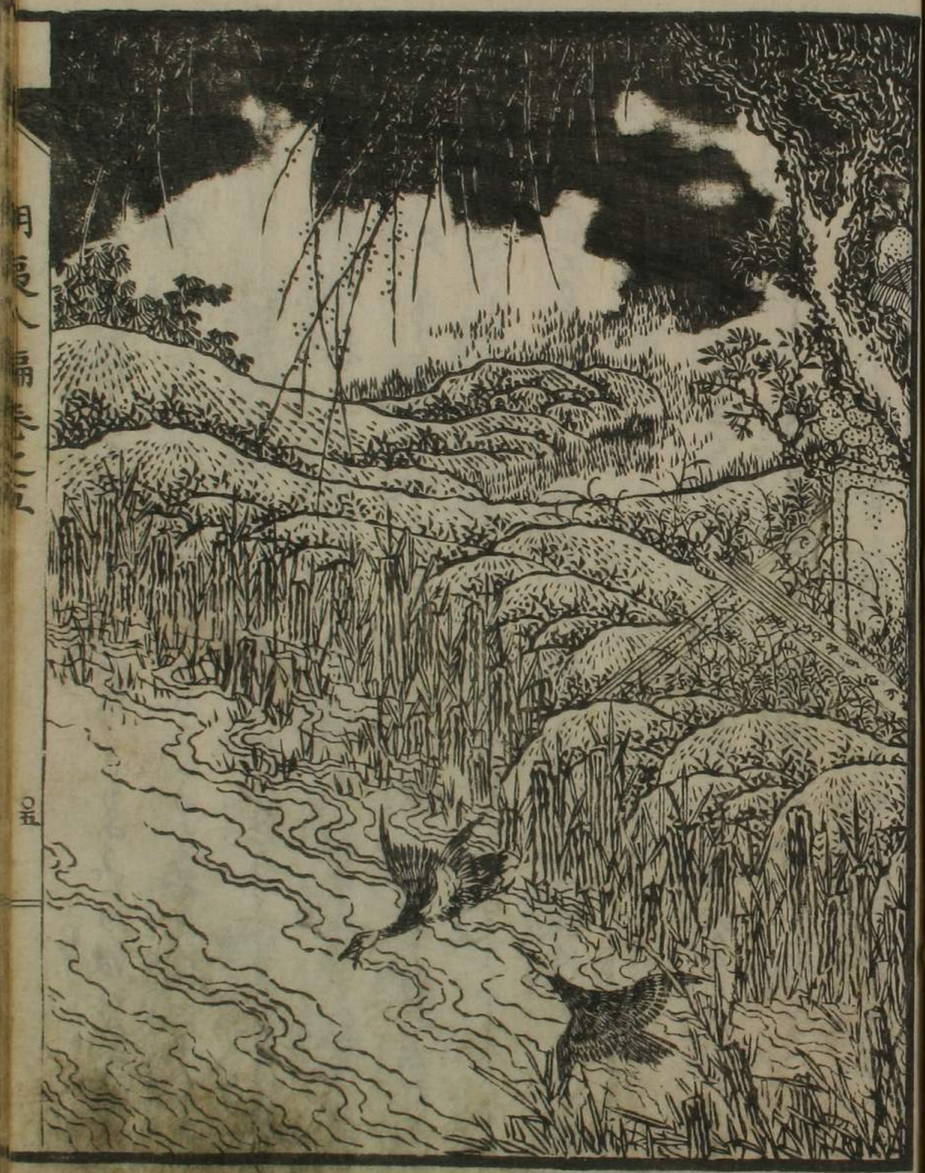
何者ゐまゞ妨ゐす。こを処離さずやと抱留る。手と拂いんと力と。究
むりの〳〵女の纖弱さ。何卒離てこそと喃と。叫ぶ声さえ胴震へ人の心
地のあゞざるべ。當下件の抱留る。雄ふいやと〳〵声とあゞ。駭きの〳〵の媛
君よ。在下こそハ三草太郎五昌之ふてはゐまと言まゞきて屢ゐのまゞ。開先
緩く言ーあげん。奈何ゐまゞこの所へ身と沉めんとゝのゞ。死ハ一旦ふて易け
まど。早てこそ後の悔ゐらんやとのハまゞ。駭く媛。さても方ハ太郎五。
思ひもよらぬ此処へ来て。吾併と留む不側さへ依ての上逸早く。孫奈
ゞ。ゐ内ゞ。と問まて此方ハ意得ゞ。何等の條う夢ふざふ。存せーゐへのハむ。
まづく此方と向ゐゞ。手と放して傍ふ蹲踞し。抑在下さの所へ参まこ
仔細ハ陸奥磐城ふ争論あり。その挨拶のゐふとて。朝夷三郎義秀ゞ。
鎌倉と発足あり。既ふまの傍と迫らまゞ。奮友の情忘まゞく。石戸太田の

両荘と訪ひ欲しく思せども。這田の君の命わろう。下まろ[illegible]び私ふ他と訊べき時多くば。因て城戸武差と。太田の荘へ遣さと光仲ぬの安否と訪ま。在下と吉見ぬの。起居と尋問せよとある。作ふうて両人ハ昨日途あそこち別ま。既ふこの地へ入ぬうど。案内ハもくぬ武蔵野の。尾花ぶ原ふ路ふこ差ひあくまぬ方と呻吟て。漸こ此処へ来やうど。秋の日蔭のさうげく全く暮て東西の。分ちもあくび荒屋の。搦火の影と目的ふて。石戸の荘と紛まびこの川副と潮こ沂ふ。稚児懐き女あり。定めて當所の人ぬらん。彼ふ問んと近づきて。言葉とかんとるそう。南无阿弥陀佛と唱ろ声ふく媛の声ふくも似たりと存ぜまどかさべーとこの思ひもよらぎこの怪ーこの[illegible]ふ問でもこの川へ身と沉めんと呻吟う。何方の誰とこの[illegible]若き女子の身。殊ふ抱き稚児と。両個ぶ命捨ふ来る。條こそあくもなれ。

女子ぬ忠陰くこと。妻夫喧豚いさくうのふ通りて身と退つふ世間ふ茂許ある[illegible]。若然らんふ不便のふ。といえど入ざる老婆心。もぶ一且ハ留めて遣んと抱き留ーハ媛君と思ひもよくぬ絆の釈恩昧の身ふつゆく解さば。死んと覚悟あくまーハ。で一朝のこるくば。その條奈何媛君よ。頓く作せめんと。詞遽く向うみらま。媛ハ悲ーさ面目ふさふ拾めうて滝とち。数行の涙ハさぬ[illegible]。この時やくく顔と挙げ。眼と屡くこの程の容子逸く物ぐう任意良人ふ捨らまて。身と穢くこの我ぬくう。先立ハ父ぬ灵ふ恥とあり。人ぬ生ぬひもかくぬこの身とこふ損名と潔よくせんぬのこ猶主従の縁と尽ぬ今盤ふ逢てこのこと。言遺す歓ぞーさ。若もこの後冥者刀称ふ廻りあ[illegible]ら。妻ぬく是と告て給べらんべこのこと。朝夷ぬ[illegible]年来日来[illegible]恩義と稟ぬくう。身の薄命ふ報うべこ。時節もあくぬ仇ふ敵る深山の[illegible]

あらで錦と飾る秋ぞなき。哀れこの身のなる果を想像れば、懐に在る稚児の顔に顔をおし当て、歎きに沈む理を実にもと想ひやすらふよりも中々にあらぬものから、世に争ふ媛と死すべきが、かゝる界に出合しも皇天これを扶けよと宣ふなるらんと飛と改め、その歎きは且くはさておきぬ。節を損て潔き名を遺さんと思ふて逸くその理顕然なれば、源廷尉の媛君と誰ならで称せざらん。然体に在下図らずも、こゝにて見えまゐらすは、御命を助くるのこゝろ報ゆる時ならん。冠者の御心奈何ども知てこれまで侍りて隠まゐらせん。小四郎ぬしが深き巧ことを推量り、弁を避んとのことならば、やむなきことまで媛君と若君の御命害に迫るは、童が無体のなり起ることは、渠らは在下が身に把ての主の仇、生かすべき狡者ならば、今宵かの家へ潜込で鏖にするとまでも、この畠之の腹は医ぞ、媛君案内すなるれ。彩のこゝらで例の如く血気に早る鳥滸と呵まるらん。然にあらずん。先頃

冠者が入部の折から、宮小四郎弘義は鎌倉に来て猶を居り、執権御内に當時義屡なりとも入あり。當下朝夷義秀大人に至と訴て、石戸の荘は當時義の邑なる所、然るに吉見義邦が新にその主となりしことは、假令かなる要用ありといへとも入部のことを許らるべきにあらず。然ればずして容易に手に入ることを不審なれ。夙に少く先達て石戸の荘を領さんと、屡執権へ賄賂ども、その條なくして止さりしに、さればこの回義邦に賜はりしを遺憾として、愁訴をなすべき為にやあるらん。彼執権が好悪なり。始終よきことなへおもへば、義邦元来驕湯にて思ひもよらぬ陥穽に陥ることのありやせん。汝石戸に往きなば、容易にことを冠者刀禰に告よと仰せはらひも、今こそ思ひ当りしは何ごとにもあれ故主の讎、怨まざるべからず。去来いざ媛君を案内せんと頻りに促すその面を、媛はつくづくとやりて、然もあらん、然ることそあれと思へども、いまだ信偽を定めかねつ。妾が今宵の一件は、実に董次が起すこととならんと



かさこ媛
三章君之
浮世を倦て
笹媛入水
せんとす

渠ゞ母ゟ斧木おゝこの程ゟ迄て種〻の恵〻と禀〻ともあり。その報いゞゟ得せ
ゞゝ。一家ゝ殪〻殺さんゝ罪いと深き所為ゝあり。そのゝ董次秋ゝ命ゟ
及ゞの悪行あゝゝゞ。吾倆ゟ迫り刃とりて威ゟゝ憎〻然ゞゞ。実ゟ殺すの心ゟ
あゝねゞ。その罪ゝ猶軽〻〻ん。吾倆ゞゝゟ命と殞ゝゝ。身ゟ忍びゞる釈あゝん。
任意このまゝ死〻ゝゝも。渠と敵とゝゝべゝゝゞ。ゝ方ゝ何と思ふゞと受て太郎五
昌之ゝ眼と怒ゝ〻牙と噬。甲斐ゟ化と宜ふのゝゝ。斧木とやゝゝゞ日来
の恵ゝも。媛君とりて折ゝゝゝゞ家の新婦ゟゝさんとまゞ。誠の心なゝゞゝ。
董次ゞ罪ゝ万死ゟ当まゝ。争ゝ敵とゝゝゞゝ。恐さとゟゝゝゞ媛ゞ宜ふゝゟゝ
ゝゟ理ゟゝ仆て理ゝゝゞゝ。ゝとて婦人の仁ゝゝゟ。曽ゝゝまゝゞも猛夫ゝまゝゝゝ所ゟ従ひ
の人後ゟ万一義ゟゝ〻ゝと。狩者刀称ゝまゝと朝夷の大人ゟまゝと答めゝゝ。富下
件の分解ゝゝ。ゝゝ不義と定まゝゞ腹と辟ゝくのゝゝゝの沸立胸の遣方なゝ

左右ゝゝ間ゟ夜や更ゝん。いゞ頓と立あゞ。折ゝ倭の薮蔭ゝゝ。顕れゝゝる
七八人手〻ゟ棒と麻縄と。三三條持ゆあり。女子の足ゟ形早ゝ。遠くゝ徒と
斧戸廻り。林竹薮稲塚まゞ。推頒探〻て時刻伸び所詮今宵ゝ画餐ゟ。
と思ひゝゝゝゝ若大爺。黄金の十箱ゟ墮〻ゝゟ眼逆ゞゝ自辛ゝゝゝ。吾仆
まゞゟ詈りゝゝ。先ゟゝゝの大騒動悔〻とゝゝゝゝゞ捨てゝゝゝゞ長ゝゝ遠ゞと
隊頒ゝゝ。隠ゝ川ゝゝの柳景定ゝゟゝゝゝゝゞ遁するゝ。媛ゞゟ後ゝゝゝ稜く雑
人。媛ゟ嗟ゝと分ゝ。遠巡農民仆ゟ筋〻〻物ゝゝゝゞ近ゞ所ゟ。三草太郎五
ゝゝ塞り。尾紐ゝゝゝゝ農民仆ゞゝゟゟ主君ゟゟ。斧〻さ地ゝの門室を
近ゝんとゝゝゝゝゝ程の式ゝゝゝゝゝ然ゝゝゝて燈火ゝゝゝく棒と縄。這ゝ誰人ゝ指
揮せ。頓退ゝずゝ逸ゝゟ。首捻切て並べゝと勇者の妻ゟ雑人ゝ何と面答り
ゝゝゝゝの土ゟゝゝゝゝ吾仆ゝ倖釈さゝゟ辨へゞ。児と懐ゝゝゝゝ若と女ゝゝ

吟呻あるべ引縛し。疾く連て来よ労資ハ。何ぞろりでも共へんと邑の歩吏
が觸ふより。這ハ邂逅の銭設け。往ぬハ損と甲乙して。催し集め燈火のあハ
却て此方のこ目標ありて便あらん。と態と炬火をも携へざれ。這ハ吾們が
巧夫のこ。此他何の思案もあらぬ下郎が罪ハ赦させよ最初らら地頭の内室
と知るものるべき争ハ。労資ふ心て掛ん。這ハ怪しかれと咎めまべ太郎五昌之推
力へし。彼てハ你等その罪あらし。歩吏を以て觸させしハ。何方の誰ぞ疾くいへと
詰り向ふれバそれこそハ宮刀祢の若大爺。董次刀祢ふてハと答て点頭も
あるべ我内室の伴供りん董次が方ふ到るべし。頓先達て案内をせよといそまれ
各立あがり。幷ハいと易き事ふとそ是よりハ路遠からば此方へ来ませと先
ふ立細ろ彷ひ歩行ふぞ。三草ハ媛を扶け曳き。往こと数町あらざるふ此方早く
も秋弘が耳ふ聞えて。筐媛隱息川きふ呻吟とゑ。自身あさて伴へんと奴僕ら

一個両個ておそ。炬火ろ照さし徑路を喘そ走来る媛ハさすえん中あるハ董次
秋弘ととハ太郎五昌之が速く董次が前ふさち塞り汝ハ宮董次ある。
我ハ往昔吉見冠者義邦の臣ふて。今ハ朝夷義秀ふ附属しゝる三草
太郎五昌之なり。遅るてとハいふしも詮ある。今さて汝筐媛ふ無雑の迯奔雑
頻そといへふよりえ進退谷まり。媛ハその家を忍び出命を捨んとしの術へ
折よく来りて扶けり。媛の伯父ふ恙なけれども。我まで媛を苦しまむるハ。
既ふ汝が所業ふ必さり。我故主のためふ。その怨を復さんと。汝が家ふ
往んとするを。汝早くもここふ来て。必會ろハ物怪の僥倖を我に勝負
せよといひも果ぬふ腰刀すらりと抜てそち向へバ董次秋弘迄ひもとせん。
悖とゑてるが今さらに。遁き隱きんやうもあるく心裡ゆへ十二分の怖きあれども
詮方なく。胸お定めて答るやう。冠者ふ捨られ便術なき身を救くのぞ不

便さを。若しも心を應ずるべ。この孩児を守りて。石戸の荘を安堵する。性未だ日計らんと。好意を以て語らひと雅頭ありとの謂なり。性の兼ねまた條あるべし夫れ家を拔出死なんとするい。媛が血を流すを見て。我れ一向無くもがなと汝斥言と。僻耳を聞えさこと。故主のうを怨まん。人の狂人の狼藉。媛が疾りの私夫を意得がてとらせも敢て昌之が身を遁まんと左右とも誰が誠を汝が今いと如くなのと悔しと。媛が黄泉と捨を出るんや。畢竟己が非を体り。他を愚をするを一言詞戦ひを益なり。彩技放えて紐飲汝を殺さる我死すう。両箇のを究めぞい。元の鞘へ収まる。然いと口の根横裂を裂くまんと電光の見くどき及て賢一声のみて打込べ今い猶縁もあるべこと。董次も刀ぬきこを出せ設矢とと要内ぐべ。右を一左を外。虎乱青眼上段下段挑を刻く景勢と

いる雑人等いむ〳〵膽の心い消るべりを恐れ燃えさりる炬火を熟さ見えて抛り出し。枯葉〳〵と逃散まべ。今まで月き火影さ暴を墨云の暗及の光りて目的を東風西風太郎五が尖を太刀と受損じ。董次が肩先五六寸。切込まるを腕弛と嗟と叫びて揑と伏たまると導を昌之い足踏れて微塵をるまでうち込む刀を肌中とぞりずんど切放さまをもえさてぞ秋弘い。その内平張死でがりかる折〳〵雑人が孩を皈り箇様ことの。知らせを人〳〵ち驚く。折しも修験酷残いかくとのるべを昨日の謝徒且その毛尾と索わんと来りそこの閑室を。酒宴とまべいあるべきと。在合せる酒殽をいてう辞と催しるべ。為に暮をあるよび笹媛何方性をんうえべと家門の男女さち噪ぎ。中をも董次秋弘い。雑人們と呼び。集め。左せよ右せと指揮して。行方と探しを索むると。眉毛の火と拂ふがぬくいと噴すをく

変る程ふ。這い怪くまぞ然いあるとて他の間ふ住方い知まんと猶孫ふ
えくふこの注進。开い何奴ぞ一大ふと。小四郎弘義さちあぐり。刀あつ把り延
出んとするとき。斧木い雲竹と狂め。雑人们も周章惑ひて。そのい所い定か
ふくねど。媛ゲ由縁の人くて。然も拒むい中ふ。弓人えるれ奴ふ怒るとき辛
示ふするふ。不憶退あくん。人数多ねて往ふ人。そを甲も未よれも未よ小
四郎刀称い心こそ。猛くい在せ老年ふり。你達傍ふ屏副て逼るれ。弓針
ら人よと狂乱の如く立まいるこをとうふける酷残も己弓矢と執る血ふあく
ねど。義とうそ為ざるい勇ふ。倶ふ往んと締ゑれ弟ふ狭め。一刀ふ。そを貸
ふくと傍ふ。刀一腰借らけそうんとび長押ふけらる薙刀こを屈竟のふそ
あまと。外てそまを引抱ゲ。是ぞふあまび僻者の首薙落さら畠の崑
崙瓜を伐ら易くと誇りふ。勇ミ立る義勢ふ曳を農民们も嘈こと。

罵り立て引副ら。弘義いそ董次ゲ刃のうい乳遣しさふ胸のうい蹴り
そども足い猶ひとう所と諸ぢく。息切を心昏迷し故もうぬまふ弱る。
乳と励まて十町ふ彷。隠を川きふ近づけと如法暗夜の何方ぞと人ある
方もうそえうろむ。雲時汐湛そのうふ。ち合ふ刃の音吱え嗟と叫びて
倒てゆるうゲ。児の声と弘義いあるふもあくまび炬火と自刃持て地せ考
うくふ。去慙ゆるる秋弘い肩先朋中斫放くを。殷ふ深くる景勢ふ右又
を向ひふ潮えるる。壮士い己ゲ子の敵を処動くると。詰修て宮小四郎弘義
ぞ恨ミの刃くく。請よとうひて引抜く氷の刃。意沈りと三草昌之血刀振て
ちむい年こそい老を弘義も脆ふ弓人えのあるりのあまび得昌之猛こも
左右ゆくい下風ふ立び後ふ引副ふ修道院僅ふ敬い一個の青春何条ものある
べきぞ者共砂と掻掴こ眼潰しふうち挂よと指揮ふ。薙刀の鞘て外てあう

楸のごと淀の川瀬の水車鳴戸の潮八丈にあがるといふ黒汐の渦巻ごとく搏るゝ。廻えてかゝるて昌之ハ信と白眼汝ハ誰ぞ宮が先道を佐くる狡者世に二ッとなき法師首とらんに把まして後悔するなと飛鳥の翔り陽炎稲妻ぞする架頭ハと彼処に隠れ争ふとやく半晌可當下宮弘義ハ渾身に数箇所の疵を負て心神疲れ撞と坐し刀を杖に息次居る。酷残ハ後をもやらじと薙刀左右に晃う。躍りかゝる程昌之ハ一上一下に請流し刀逆手に薙刀の潸形發矢とうち返せバ。酷残堪へバ薙刀を反落されて心悸き拾ハんとして俯く所を昌之透さず手をさし伸べ右の腕を丁と斫る。切られて酷残猶臍まず。拾ふ長刀晃う足を攫へバ飛騰り。上より撲バ死を平め諸身に空を拂ハせて思へバ叉る朋腹を両段にうちまして切落む太刀。最得最初の右手の痛疼むのとゝうハ滴る血花に黏すれて肘の自在をえず。

請損じて肚を切放されて倒るゝ。卻舎迸る血ハ巌角にせかれて落る滝のど。大腸小腸瘡口より流れ出て作叉て物をもいはで死ぐりけり。夫酷残が死にある。自業自得といふべし役小角が流れを汲て有髪ながらに僧行を保つを以て優婆塞といひ孔雀明王の経を誦し。國家のために太平を祈念なすべき職に在り。かの雲に乗り空を翔る外道の法を以てつとし宮弘義が賄賂の黄金に惑ひて邪道に共し。幻術をもて人を瞋せ人を火坑に陥さんとす。その罪忽地身に報い。叉の精とまりぬるに実に皇天ハ邪悪を罰まして。その餘の人も猶然り。是等を以て閲する人の勧懲とハなるなるべし。于茲斧木ハ弘義がいのちさらするその子なる董次も敢て音信なけれバ今ハかくしく按ト苦しく門きに出つ右視左視れど一向姿も見えざれバ一人遺りて千万の物思ひをしてあらんよりその場にゐられ

咲ふ如くと沉吟す。厨温ふ居る炊女と一人遺る小奴とを促し立て蹤
る。畦路伝ひと一散ふ遙の火影を目的に走りて彼処へ近づけば嗟
嘆やな弘義が刀と杖ふ倚て息の有る人分らぬふ董次が内っ
けん。殷ふ深く倒れる。まと修道院跡残も作反死してありるふぞ這ハ道
ハ如何ふとぞるふ。まづ弘義が傷ふ修せ。まづ耶息ある容子耳のそ
口と傷せ。斧木ふ伝り小四郎刀称心定のふ持の人女でとあまと良人とるて殺
さまさるる。當の敵邑媛とも諸共ふ対て怨と報うべ。然しとも彼奴ら何の
へ隠れ忍びん。出よくと大声ふ呼る声を咲つけて三草曰之忽然と殺ハ
れ出て汝とを。弘義が渾家斧木よる。汝達ふ一面の交りふけまど恩
もう。恨こあくねど故主対者刀称夫婦と種々ふ陷まと咲捨ふ。ぬ無事
その人の為ふ恨こと復すのこと。そや是まもあて腹ハ函め死骸ハ汝ふ見て歩る。

追善供養ハ勝手ふるせ。と咲て斧木ハ小四郎が突る刀と扱ぐりて。
汝が為ふ良人弘義子の秋弘まを殺さまる。追善供養ハ汝のそと
邑媛との首刎て供る他ハあるべ。覚悟るせよと怒りの面色血刀
振て立ち対ふ三草ハ呵ら笑ひ罪ありて父子の奴等誅せ。まとる
仇と。報りんとハ僻ふ。汝女ふあるざるべ。倶ふ三途の乃連と做さんハ易
さこと。妻孥の殺生刀の穢まと助る命と捐ふ来る火影と慕ふ夏
の虫ふ愚る所為せんとるも。疾く帰まて亡者の後世弥陀観音と憑むが塔
ぞと。朝らまて狂急さる。斧木ハさるふ面答もあく。纖弱女子も疑る一念
乱まり髮の逆ふて裾ふと返さて夜半の風炬火の光りも絶こる。小暗き
方ふ立さり。媛とるるとの絆の紀りハ媛ぞまづ渠と。とらひさる御と紅
葉る斧木と昌之把て引居ると。潜り抜ぐうち揮る刃うち穣えんとさる

卻舍肩先破羅離と切刻衣を嗟と叫びて倒るゝ斧木三草いつんやりて這奴
とゞ扶けて遣んとゝひも。その刃の罪のその刃と責及ふかゝるぞ不便なる。然
まい去救の苦ゝとさせんよりハ一撃ふと刀振あげ立かゝると嬢ハ要はとわー
註め。瘠負の傍へ近よるとり。苦ーき息とゞと吻て。瘠負ハ首とうち撥げ。
物いひさげなる景勢なり

續輯第二十

初て非と悟る懺悔物語
好計再三到る程谷の驛

當下嬢ハ斧木ゞ傍ふ到りてやゝ〳〵声とあげ。瘠負ハ心と定うふ持。一
言いゝとあり。吾們おの因縁ゑくて何まの地ふも安堵せゞ。這般ハ究めて安
うゝんと思ゝ間もなく冠者刀称ゞ身と隠さまとふゝ。仔細許の物ゝひ心地
死ぬべく歎くとり。董次ゞ彦ゝ聞く耳さ人右流左けまとも辱しなるゞ後の崇

の護魔影ふ然もなく會釈その座とゞ。涙しるゞくもまと思ふ所伶浮世ハ
憑ゝどふるゝ刃ハ死すふ倍とゞ。と胸と定めて黄昏ふ迷ひ出ツ呻吟て既
ふ死るんとゝる時。ちまとゞ太郎五昌之ふ端なく逢て互の作天さて云と縁
故と。語まゞ渠ハ怒ふまふ憐ゞ。あん身ゞ親子と怨まんと早ゝふ理さりるゞ。
ゝゝ人来りゝ始めより心裡いゞ初ゝも。あん身ゞ鶯さ分抱ふ孩児さ人ゝ安ゝ羅
落ゝるその恵ゝ今さゝ忘ゝゞ。ちるゝずゝこの身ふ恙るゝとりて怨ゝと復さず
このまゝふこの地と退てもゝ後ふ詮方あゝんと苗むる端ふこの刃ゞ探ゝ
雑人ゞ手絶ふせんとする故ふ昌之怒りて渠ゞと懲ゝ。あん身ゞ家ふ向ゝ
向いんとゝる所へ近来る董次折とゝ善けまとゝとり合。刺間る流ようゝ
来る弘義及ゝ人の修験。とまとゝも敢なく死ゝるゝ心地ゝとゝもゝゞえふ罪業ゞ猶
倍ゝ。と半ゝ悔むその折ふあん刃ゞ来るゝ人ゝ渠いゝふも助けよと呉ゝ

いて在りしを追ぬるまで今さらに跡へ返らぬこの漂痒然もあるとて一家と共に殺を非道と恨こもせん。堪忍せよとて人さへ涙ふ哽る喘涸声斧木の殺掉あげて。およそ生とし活るの。死と惜まざるのやうある。況て一家と織ふるゝむけを恨こゝめて。九世い換るとも仇とるべき若みまど畢竟父子利ふ惑ひ義と忘まる天罰とゝ今盤ふ思ひ當りしり。常言ふも以如く人と呪咀び穴二ツと。喻へふ洩ぢ吾們が。巧こゝの枘の齟齬。鳧ふ及びぬるこの災難。争うんと欲むべき。喃嬢うんと。女ゝ人石戸の荘い縁てより良人ゞ望こと。慾る土地。然るを這回吉見刀称ふ。賜りしと。ゞ望ふ。選まと如ふのるは。計らひと。夜と日ふ嗣て北條刀称の。は。鈹へ。徙てそのゝと。怨こと。りふ荘園い。執権ゞふ。任せば。這回吉見ふ。賜いまど。彼人い故範頼の嫡子とては連枝ゝり。後こ害ふるる條あまど。汝若内の使淋と

りて。彼人とゞふ失るり。石戸の荘と賜いんと。仔細あらじと。密ふ宣ふふ弘義い一日も早く計らんと思へど更ふ便淋ゝり。竹塚ゝる修道院い昔ゝして怨ゝり。渠ふ法らひ呪咀せん。と。数多の黄金と賄賂て。憑めば異議ゝる。諾ひ。守者ゞ住める床下へ。秘府と埋めて。潜伏て。做さんとするふ。淋ふ人ゞ。因て熊虎の魔神と。狂り。隠と川ふ失るうんと。祈ゞ甲斐ゝ。當下ゝり。冠ふいその身と隠さゝ。然まで。ふ程男子ゝり。見ても。俱ふ計らんとゞる物ゞ。ゝふの秋ゝ嬢ふ。忘慕の情態深く。倘孩児まで失るり。嬢い歌ふ身とこと。捨め。嬢ゞ羈いこの孩児。ゞ世ゝ人い逸早く。嬢ゞ心と。解こと。ゝふ。ゝ吾們ゞ計らひて。董次ふ嬢と。挑ませ。ゝ。ゝい渠ゞ。頑ひて。恢へ。ゝい件の荘園と。奪いんとする計略の差ひてゝる。景勢い他ゝり。来まる災害ゝ。ゝ自業自得の今盤。善類。あまてこゝ人と。逆ゝる。血ゝふ。と。俱ふ。吻く息ゆ。次ふ。弱ゝ。斬ふ。魔嬢い

三草昌之

その水死期を
悔恨の語と

秋ひろ

ひろば

その水

件の物ぐるひとなりて、なほ毎日胸潰れ、或ひは孩を怖れ、心神寒き地に
憎さも憎し。然るに、四重五逆の罪科も、懺悔すれば消るとぞ。谷
木もかるる故とぞ。不問語の身の悪さ、この後一向恨まじとぞ。
るるんと思へばいとど不便さに、掌を合せ、伏拝み、西方浄土の阿弥陀仏
世にかるる非業とも、引接あらせ給へ。願以此功徳普及於一切自他平
等と念ずるも、涙ぐるるの田向文三草太郎五昌之も、倶にこちらの
罪とて、倍礼て死ぬるの潔人の形ぞ。死んとせんとの聖の格言
るるるると血刀拭ひて鞘に収め、今の女子が物語、北條力称が形を
所以の分るるとぞ。冠者の疾りそのことを聞てこの序に成て隙ぬ
るるんと右にも左にもの地に在さば、後の災害知べるべし。在下既に當て詩
ひ朝夷大人と逐ひて。碧城へ赤る告るるるるる。危急の場に臨んで嫌居

の位安居とて、彼処往まんや。城戸四郎武詮に使して太田へ走りぬ。
さまざま今より供す。太田へ往て光仲ぬも在さば、俱に商議。この後のこと計ら
いん。心奈何と筐嫒問まてそまに仔細にまじ。馬飼標吉が朝夷大人に
告んとて、この地を死行しが、かの大人にぞ陸奥へ首途の所なれば、夫れ帰り
来て憶ひもよらぬの大変吾倅の往方を尋ねまば、途方に迷ひんこのことを奈何
に世にしたがるに昌之右左の思案も著く手を拱きてその折を嘲て来る
ものと。誰ぞとこんまび嗣忠が。歓ぶ両個が侍に蹲踞。昨夜漸く夫の刻
頃疲倦之到を著き。和田殿へ参り。朝夷大人に如此と。昨日この地を
殻足あり。碧城へ下りるひとぞて望こと失ひ。先ずとて嫒君に告て綜て行
らんと今朝の彼処にも平ぐ心急まて樹の根に躓き、凡て跳ねて疾く
忠の外に道間違て。帰のてんまび人の居ぞ。庵温に跪む牧童に人の家に

如此こゝに。こゝの殺さるゝて夫の。宮ゝ妾も内室の。住して彼処へ系ずゝうど。
いと怖ゝさ武夫の。彰ゝを出て内室も。切らるゝの入るゝうも。乳も魂も
身ゝ副ゝて逃帰りて伝ゝるこゝの。その狀詳ゝ知りがゝく。走ゝて来ゝ。と
その類末と語りゝ。然ゝもその折ゝく。三草姓の来ゝて。嫡君のゝ人恵
るゝこゝの伝ゝるゝを如ん。と歓ぶゝたゝるゝば。三草も程ゝく参ゝ狀ゝ。
然らゝば今も言ゝる如ゝく。太田の荘へ赴ゝんと。一決ゝて主従三個。ゝゝ出
終夜太田と伴ゝて歩ゝり。安平ゝ某生再説陸奥ゝ。朝夷三郎義秀へ。
脱ゝ猛ゝ異見ゝ同ゝ。越中へゝと止め。一先弦金ゝ飯らんと。岩城の
民ゝ。ゝゝより還ゝ。痩負擒ゝ護送ゝ。白澤城より引皮ゝ本街ゝ。ゝ
みけゝど道程遥ゝ隔りけゝば。逐ゝ蒐来ぬゝ者もゝ。平ゝゝ武
義ゝ絶。程谷の駅舎ゝ著ゝ。彼処ゝ推ゝの幕ゝち過ゝ。兵の多

少ゝ紛ゝ。軍勢屯ゝ。朝夷等ゝ。ゝゝ。這ゝ。ゝの出
来ゝ。ゝ且ゝ居ゝ。その容子ゝ。ゝ。一旅店ゝ。甜ゝ。宿の主
ゝ問ゝ。何ゝ。存ゝ。昨日の薄暮遽ゝ。
所の人民。ゝ。或ゝ。老ゝ親ゝ曳ゝ。揖ゝ。ゝ。資財雑
具ゝ運ゝ。敢ゝ。今ゝ。軍ゝ。始ゝ。逃迷ゝ。猪擾ゝ。ゝ。陳の
統領ゝ。葛西兵衛清重ゝ。使ゝ。五六個。ゝ。猪擾ゝ。制ゝ。
陸奥ゝ。将軍家ゝ。使ゝ。遣ゝ。武夫ゝ。彼地ゝ。叛逆ゝ。眼代
地頭ゝ。殺害ゝ。ゝ。ゝ。注進ゝ。用心ゝ。若ゝ。
主人ゝ。葛西清重中條左ゝ。門苅田平次ゝ。ゝ。武士ゝ。ゝ。
張ゝ。不虞ゝ。防ゝ。必敗ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
漸ゝ。安堵ゝ。思ゝ。ゝ。平生ゝ。ゝ。吾ゝ。活計ゝ。ゝ。義ゝ。

と尾ふ尾と著て注進し。我と叛逆謀叛の徒とのひとりとて安うゝね。然ハらば
是より葛西の陳へ往向ひて縛の釈と逐一ふらひ拵を通ふ若ハど准後
とのす。獣六郎と猛八ふ。俱ふ往んとをけまど。我一個ふん縛足ぞるん多勢ハ
却て宜ゝしと。制して頓てくもち歩ふ。葛西の陳ふ到すーうべ。清重自此出迎ひ
寒暖の礼と述かくそ清重いるるう。足下先ひ陸奥の検断使とこ祇られ
ーぐつるる趣意う磐城時直阿武隈大夫その他の諸士と。斬害するのこ
るゝず。農民救ふゆ集會旗と推さそ傍若無人の挙動ハこは逆心ふ。
疑ひあゝぐと膳沢荊原その他の知縣が早速の。紙書の赴と弁因てこの
地へ我とさ向らまそ拒ぐーむ。然るふさせる人数ゆ率ぞ。帰糸の条ハ神妙
るまぞ。つるまぞ形猪擾ふ及ぞまるう仔細ぞあゝん開ハ後会ふ又りて後宜
ちく言上あゝべきまゝぐ在下笘ハるる麦ふ在りて。足下と止め時宜ふう。防禦の一弦

做さんとするまゝで。除のこるハ無らず。擾て今より後会ゝ。足下ゞ後糸の上と
訟へ此ゑと通路ハ下知ふ任さん旅店ふ在てその沙汰と俟べーまり
けまど。朝夷謹ゝ領掌。時直以下と斬害せハ。深き仔細のあるこるれど。
証拠るくハ叛逆るど。詭せゝまんゆ打惜くその徒と生捕ぞりて長ぞるの
ゝと逐一ふ注進あまと憑ゝう。旅店ふ飯り如此ゝうと猛八獣六ふゆ。語り
ぞりてこまと埃ふ翌日ふ到ぞ葛西の陳ゝう。使節ゝて武士来ゝ。義秀ふ對
面るて。昨日足下ゞらくそゝ赴き領ふ言上ふ及ふの所廣元善信以下の老臣尚
注所ふ會合あり。衆評穿鑿せらゝ処倘義秀異心あゝべ。ゝや何ぞの事
あゝとゆ。先謙会ハ訟へて。公裁と作ぐべきふ時直遠臣ゝうゝるゆ。こまゝ軍
家の股肱るて。討果を条その忘ゝるぞ。加之その坐ふ在あハ諸士と害剣ハ
彼処と退く時ふあゝび農民と集會隊伍と做ゝ。その容軍陳の趣ふ

まゝ心ゐ叛逆あゝずとも。その形ゐ彰はして。罪ハ免さ難ゝ。同てその況と後
舍人ゝ赦さまゝず。但し証拠の為拘ざゝひる者と生捕曳せ比。そ生笞死
さゞ瘁の源意。まこと叛逆の有ゝとも知らまゝ同てその擒ぎると菖西の陳ゐ受
把て後舍人送るゝ。夫より執権の紘ゐ於て擒ぎると鞫問しつゝ盤城時ゐ
笞るゞ。害せゝるゝき罪と犯し。且義秀一点だゝも。非分あゝじとゝゝの分
ゐ當下ゐ後舍人召るゝ。此ゝ宜く執達をゝ。ゝ下知ゆそいゝゝ。玄来ゝ件
の虜擒笞て。在下ゐ遍ゝ。その准備ゐて雑人笞て。召俱てゆぞと主人
菖西清重ゞ口淀とりて演ゐゝ。朝夷攻て思ふ。この生捕笞ん時ゐ。
従来阿黨せゝのゝまゞ右の如くゐゝ後人執権の紘ゐて。この後のゝとひ
舍むゝ。然ゐあゝずゐ余と取り。証拠とゝのゝべき口と減じ。我と後て重罪ゐ墜
さんゝゝ。較計るゝゝ。好智ゐ閑し執権。巧ゝゝ罠ゐ罹らんゝと心裡ゐ冷

笑ひ。あゝまゐ舍てゝゝ。ゝ淀の源さ執達ゝて具ゐ美諾仕つ。然ゐ
かの擒笞ゝ。ゝる時直ゐ共せ。族其坐ゐあゝて在下と害せんとせ者ゐて
あゝまゞ。渠笞ゝと召させゝれ。鞫問あゝゞ已と是ゝ。在下ゐ非と
ゝゐまゞ。然ゝまゝゝ執権の坪定悉皆画餅ゐゝん。頼ゝゝ在下と渠
笞ると俱ゐ召させゝまゞ。對決ゝるまゞ當下の理非逸ゝ分明ゐゝゞ。然ゝゝ
ゐ於ゝゝ在下ゞ汚名ゐ時まゝ雪ぎがゝ。糺問ゐまゝ労煩ゐゝ。
故とゝて擒のゝ。進らさんゝゐハ不便ゝゝ。この義宜しく吉上ゝて再ゞ
ゝ左右と族ち。奉ゝとゝんまゝしけゝ。使者と共と兼ゝ。然ゐゝゞその
ゝ清重に。代ふべゝとゝゝ帰ゝゞ。その明の日ゐ至りゝまゝ二人の使者来
ゝ。昨日返答の赴きと。即刻言上せ。処その義理ゝゝふゐ仏ゝまゞ。既ゐ逆
意ゐゝ不猜ゝまゞ。その許と謙舍ゝ。入ゝゝゝゝ雑。同て擒のゝと召し。

夢六郎
まつ八
いけぞう

うひく
ゆさら僕
葛西が使者
陸奥の擒を
遍与きゞと
談ず

理非明白ふ糺さんと作さる処をもて拒むその理つゆく云ひたる思ふふ
言葉に比ひなん。猛者なるへ人金知まり。殊ふ渠等ハ擒の功とあるを
其許と鬼神のごく怖惶る故ふ是と對決るさば。渠等が理とも威厳とす
非とひ枉る較計るゝんこの議決て赦さるべ。さるべいよく擒の渡さ
るゝその逆元脱ふ十目の視る所十指のゆびさん処ふ差いた。因て理非の乳
断ふ及ぶべ。軍勢とさしけて。其許と殊さべ。ぴよく一点も逆心るくべ。ハ深ふ仕
と擒を遍与ー。後の日沙汰と俟べ。この返答よく笠届け。時刻と徒さん
復命せよと厳る命るり。さるべ擒と速ふ遍与さるる夫ふて。遍与さる
の日返答兼るりと詰りけり。義秀少て諸老ハ。評議の結構奇き
る。威厳と以て非と理ふ枉げ。人と誣るハ市井る。俗ともとき恥とせり。在下
苟も和田義盛が。三男ふて教るゝねど柳営の近臣ふ擇まさる一個の壮夫。

任意命と徴るゝ。その罪科ふ犯さとも。必と追まんて罪る人と隔るく
ぶ。ハる黒き心の義秀るゝ。老ハ笠が見差ふのるる。かるハ沙汰ふ及ぶ
義盛と始め一族笠が。堅壇ふ在り因て在下推ふ。まし扱うと存ずれ
ども。強て致さば命ふ背るの恐まり。還て不忠の名とるゝん。さるべ徴
ハる愚存ふ。應ぜざるとも命の重さと惶ミ擒ども。清重ふ遍
与さるべ。然れども擒笠。万一命絶るふ至まば。実ハと明らむ道と失ふ
故ふ弦中ふよく動ずん。恙るらんと要ハ。和殿笠ることと意めて朝書の
手充と做ーハ若今日ふて死るる擒笠。明日不慮のてゝ。侍者の所
為ると思ハん。この義と克く執達あるべ。と答へ。ふるさい言ふ使者。その
ふ意めるり。頓清重ふ伝へて受把ふ来るべ。この旨ふてのるべ。
急ぎ陳所へ帰りゆく。その後影と見送りて。猛八ハ進ミ出大人ハ侍者の悪巧と。

粗容易ならず容子然るに邪とも権とも。做さんとすれば敢て。彼生捕られ送りの人々と往術なる紙を仰せまどど。遍ねの人々此方の理と却て非分なれば人做さまと罪なれば身に濡衣と著るるんと必定なり。縱令生捕と遁れんとすれば逆意ありと軍勢と向らまさんば我とも及ばざるべく和睦なれば。故に一命と。この紙を抱るのと何条恐てとあらん。理とりて非分に陥るべと安閑として後に至りて一命と失ふたりの雑あると。今軍兵を引うけて。切死すると就う勝まるべうー遍なさんと約いるすとも。変改せんいと易う克く思維ーの人と義秀の形ち成り。勇気面に彰はれたへと憑べくんぞ。朝夷いまて拱き黙りて義気感ずるのと畢竟この段猝長くして。この編の説鳴さば。第九編に精く解べし。看官宜く發兌の日と俟閲ーのみんとと希ふ

朝夷巡島記全傳第八編巻之五終　村田

朝夷巡嶋記

同	第七編	松亭金水編次 葛飾為齋画	全五冊
同	第八編	全	全五冊
同	第九編	全	全五冊

義秀陸奥の擒を牽て鎌倉に入らんとする程谷に柳営の数回の問答是非なくもかの擒を遁すに及び執権の奸計義秀と陷りとんと巧めを剛若の猛人智術と以てその證と立はすべき変化量の新奇妙算和田合戦の兆を含むその顛末もこの編に詳に解て看るに飽ぞ稍に佳境に入るのみ

編述　東都　松亭金水稿本
出像　仝　葛飾爲齋畫
淨書　仝　梅亭金鵞
剞劂　京都　樋口與兵衛

鉢被全傳　復讐初瀬物語　栗枝亭鬼卵著　葛飾北明画　全六冊

信濃筑摩川の名ふ厨五平と云農人が女怪亂に成り妖狐厨川伯太郎が出る河内国交野の乙女山上が女初瀬神祇ぎの母継母水夫が変恩の母拷洋丸大沼左張が横死を子孫交の仇を尋て國々に初瀬再会の奇偶より父の仇る妖狐滅亡の物語記録の実録を記す

安政五年戊午春正月吉日發行

刊行　大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助
書肆　同　北久寶寺町　河内屋源七郎　合梓

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通　北久寶寺町　河内屋源七郎

楠二代軍物語　平かな　絵入　五冊　繪本雪鏡談　春曙齋作　同画　十二冊

楠正行戰功圖繪　前編　十一冊　同金花談　春蹊齋作　并画　十二冊

小楠公正行父正成卿の遺訓を守り南帝の御為に忠を盡し一生涯屢寄兵を以大敵を破る美談之

同孝感傳　同前　十冊

神功皇后三韓退治圖繪　五冊　同亀山話　同前　十冊

國史実録にも上古の事は詳かなり難記を今番新さふものゝ事を表し繡像もまた今代の容態を寫出し初れば見女子の用をも既いまに見えり看官宜く事實を辨せば作者の筆墨と畫工為齋の意匠を賞し給へ

同顯勇録　同前　十冊

同忠孝二見浦　南里亭著作　柳齋重春画　十冊

九州諸將軍記　十二冊　同月宵鄙物語　真顔作　十冊

復讐石見英雄録 初編 七冊 繪本誠忠傳 遠水春曉齋作 同畫 十冊
同 二編 南海玉藻隱士嗣述 七冊 同 合邦辻 同前 十冊
同 三編 小澤東陽主人嗣述 六花亭富雪画 七冊

復讐石見英雄録第四輯 七冊 同 芦芽草紙 淡花鐵格子著 石田玉峯画 十冊
南海玉藻主人 嗣輯
浪花 鶯齋歌川芳梅書
近日發販
本輯い拙松充弟が七人の武者修行を挫きこれ
別に岩見狂雪野村彩十郎と名乗て来る入り
婚牛及人コ逆い丹波ふ主く及盜を斬の一條
狂歌五輯ゐ列こい丹州の義後祖舊の子脇ユて
毒悪の婦婦を除き文鬼の大敵を滅ら快話之

同 浅草靈驗記 春曉齋作 同畫 十冊
同 忠孝美善録 東籬亭美人編 春曉齋翠信画 十冊
同 彦山靈驗記 遠水春曉齋作 俤画 十冊
同 鶯英勇記 同前 十冊
同 金毘羅神靈記 同前 十所

祐天上人一代記圖會 六冊 祐天上人死靈解脫物語 二冊

新累解脫物語 曲亭馬琴著 菖飾北齋画 五冊 小梨外傳 小枝繁 北齋 画 十八冊
昔語質屋庫 曲亭馬琴著 勝川春亭畫 五冊 繪本忠臣藏 平安遠水春曉齋作 同画 十冊
同 中編 彫刻 五冊 同 後編 十冊
同 後編 彫刻 五冊 同 拾遺 彫刻 十冊
兼漢の古器珍物の質屋の庫にて各身の上を誇り
合て試けて古来伝説の誤りを明らメ曲亭翁の妙
作を中編後編の種数柳川子の傳け彩奇の説之
拾遺の一編に義士仇の後話ゐ
始終貞操義烈の美談を編るくまるに

朝比奈巡嶋記 自初編至六編各五冊 馬琴翁著 豊廣画 卅冊
同 七編 松亭金水嗣述 菖飾為齋 画 五冊
同 八編 同前 五冊
曲亭翁の旧著ゐて鎌倉の時度を知る史外の奇
書ゐいふ比妙案ゐれば賴家卿安達系盛ゐ義を奪ひ家
七輯を見いれ賴家卿安達系盛ゐ義を奪ひ家
こと朝比奈義秀ゐ稽断使を義ゐ奥ゐ趣旨忠
信終ゐ義時ゐ女に計ゐ福ゐ勇ゐ倉に亀徒ゐ

書本西遊全傳 一潮子水山人譯 南都大原東雲画 十冊
同 二編 同 十冊
同 三編 岳亭翁嗣譯 北齋老人画 十冊
同 四編 同前 十冊
本編の演戯三国志水滸傳金瓶梅
の四大奇書と漢土ゐて称する絶妙の作を譯り
話るれい書味面白ゐ

松深情史 秋七種 曲亭主人述作 六冊

阿波久松の近記世話を古へ南朝の末の俗世の人時あり川一忠臣勇士の節義をうり強盗深松が古主の與に義を死するを見て気おくれ

石言遺響 同前 蹄齋北馬画 五冊

遠江の國小夜の中山なる夜泣石数種とーさく

薬川の里の奇談をんど哀也におももろきゆ説〻

月冰奇縁 同前 五冊

金花夕映 梅暮里谷峨作 北嵩画 五冊

世こゝる唐金蔵右衛門がこゝを弧せるゆ流り

孝子嫩物語 蘭山作 五冊

繪本夜船譚 蹄水齋曉齋画作 六冊

繪本那智白糸 蘭山著 北馬画 六冊

同魁草紙 青蓋三雪作 五冊

同奈古曽の潮 風和亭鬼武作 蹄齋北馬画 五冊

同平泉實記 逢水春曉齋 連作 承圖画 十二冊

同自來也説話 風和亭鬼武作 十二冊

同口之碑 千鶴庵萬亀作 春跡齋宝馬画 五冊

風流俄天狗 前編 後編 十冊

村上杜陵子の撰きるゆこて南士 李虎 半九 藤平 淀川 月桂 三雪 田治 又治 ゆとゝ

仕組ゆれば俄の物向ゆかゝる弟ものゆゝ

小説八十島影 谷日菊亮作 十冊

一代記 育流斎画刻

復讐初瀬物語 栗枝亭鬼卵著 北明画 七冊

厨五平が女怪嵐こゝれーとゝ妖賊厨摩御大郎が出身所川國宗野の郷七山上ら女初瀬行被きのこと

絶冊水走が女西のゆ 摂津國大江左膳が候処其子左近父の仇を密山て國ゝ初瀬ふ再會の寄偶ゆゝ父の讐さ妖賊を滅せと 編初瀬の觀音の霊験と添ハ

紙治小春 椿生淡 東魚作 春巣画 五冊

復讐東東物語 金太楼作 揚斎正吉画 六冊

同安達ヶ原 石田麦李画 六冊

再開高臺梅 栗枝亭鬼卵作 六冊

繪本白璧草紙 東里山人作 岳亭画 六冊

見外白宇留利 五冊

通俗亜山夢 十返舎一九作 五冊

貧福太平記 春の屋主人作 保之画 二冊

閑際筆記 懐齋藤井先生著 三冊

新田足利を外名將の評論聖武帝の偽を重んじて長室皇子を賜ひ論美徳園谷汲の油の石脳油をゆ漢人我國いとを記也

谷岳譚 あるゆ小島玄慧が聖德太子を聖人と過誉の私論を剥

韻鏡 ゆゆ帰納の字を見て穢れを迷る俗説を破り論 更由の説 ゆ古公人臣さるこゝを忘れ思いぬゆ

雅文をあけ 漢人我國いとを記也 餘 和漢古今の 浮屠を抑へ妖怪を斥ゆる切要の書之

教訓鄙都言種　前編　後編　全四冊

百家琦行傳　岳亭五岳著　五冊

雨月物語　上田秋成著　五冊

桂林漫録　桂川中良先生著　二冊

美作孝民傳　十冊

續孫子兵法　播州廻り　九作　一冊

三條小鍛冶名劔由来

合戰評判

昭代著聞集

古戰評判

太平記　片假名大字　廿一冊

續古戰得失論

續太平記

三都

江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛

同　京橋彌左衛門町　大島屋傳右衛門

同　下谷御成道　紙屋徳八

發行

同　馬喰町二丁目　菊屋幸三郎

同　中橋東中通下槙町　大和屋喜兵衛

書林

京都三条通御幸町　吉野屋仁兵衛

大坂心齋橋北久寶寺町　河内屋源七郎版